ルイジ・パレイゾンの解釈学――聖書解釈の視点から――[1]

岡田勇督

1. はじめに――聖書解釈・イタリア解釈学・パレイゾン

解釈学という分野のもつ重要性は、神学や宗教哲学を含めた広い意味での〈宗教思想〉においても、聖書という特殊なテクストを読み解くことを趣意とする〈聖書解釈〉においても、昨今広く共有されている。たしかに、解釈学の思想史的な叙述においては、どのようにすればテクストをより良く理解できるかというテクスト解釈の〈方法論〉から、解釈とはそもそもどのような条件のもとで成立するのかを問うより哲学的な〈存在論〉へと解釈学の関心が移行してきたということが語られる[2]。そのような意味で、哲学的な〈存在論〉へと発展した解釈学にとって、聖書という個別具体的なテクストの解釈やその〈方法論〉を問題とする聖書解釈は、もはや過去の営みであるという意見もありうるかもしれない。しかし、〈存在論〉として一般的な問題へと練り上げられた哲学的解釈学もまたテクスト解釈において具体的な適用の場を見出しうるがゆえに、哲学的解釈学の理論を聖書解釈といった具体的な場に改めて戻し、検討することは、〈理論〉を〈実践〉へと架橋するという意味において必要不可欠な作業であるといわざるをえない。その意味で哲学的解釈学と聖書解釈学はつねに協働の可能性を念頭において作業をしなければならない関係にあるといえるだろう。

日本における解釈学の受容という点に目を向けると、従来はやはりドイツとフランスという二つの大きな源泉が支配的な支柱として存在していた。一方で、ドイツはシュライアマハーやディルタイといった古典的な解釈学から、ハイデガーやガダマーといった哲学的解釈学までにまたがる解釈学的伝統の源泉ともいえる位置を占めている。日本においてドイツ思想を学ぶということは、とりもなおさず部分的には解釈学を学ぶということを意味していたのである(もちろんドイツ古典哲学や現象学など大きな潮流の陰に隠れるようにして、ではあったが)。加えて、このような哲学的解釈学は神学思想へと流れ込み、ドイツ神学において解釈学的神学というひとつの有力な立場を形成している[3]。単に哲学のみではなく、神学などの宗教思想においてもドイツの解釈学は大きな影響を有していることがわかる。他方で、フランスの解釈学はドイツの伝統を受けて出発した後発の立場であっ

たが、リクールという天賦の才を受けて哲学のみならず宗教哲学・聖書解釈においても世界的に大きな影響力を有するようになった。リクールの後継にはジャン・グレーシュやジャン・グロンダンなど、おもにカトリック的・形而上学的な立場から解釈学的宗教哲学を展開する流れがあり、解釈学の伝統を引きついで発展させているのが見られる[4]。これらを哲学・神学・宗教哲学の分野における先進的な思想として受容する中で、日本における解釈学がドイツとフランスの伝統を主に参照するようになったのは、当然の成り行きといえるであろう。

しかしながら、近年これに加えて国際的には第三の伝統に注目が集まりつつある。それはイタリアにおける解釈学の潮流である。背景としてはフランスにおけるポストモダン思想が大きな山を迎えたのち、その問題意識を継承するイタリアの思想家たちがイタリアン・セオリーの代表者として紹介され、そのなかでイタリア哲学が国際的に評価され始めたことがあるだろう[5]。このように説明するとあたかもイタリアにおける解釈学が現代における新しい思想潮流のような印象を与えてしまうかもしれないが、イタリアの哲学はキケロ、ヴィーコ、クローチェなどの強いレトリックの伝統に見られるように、もともと解釈学と強い思想的親和性を有していたといえる。この地盤にハイデガーやガダマーなどのドイツにおける哲学的解釈学が流入したことによって、イタリアは解釈学にかんする思想を発展させることになり、近年の再評価と繋がったのだといえる。

イタリアにおける解釈学の歴史において特に重要な位置を占めるのが、北イタリアのトリノ大学である(場合によってはこれを解釈学の〈トリノ学派〉と呼ぶこともある)[6]。その草分けに当たるのはルイジ・パレイゾン Luigi Pareyson (1918-1991)であり、実存思想やドイツ古典哲学、美学や宗教哲学などの業績によって戦後イタリア哲学界のなかでも有数の重要な思想家として知られている。このパレイゾンに薫陶を受けたのがジャンニ・ヴァッティモ Gianni Vattimo (1936-2023)やウンベルト・エーコ Umberto Eco (1932-2016)であり、この世代の活躍によって解釈学のトリノ学派の存在は一躍世界に知られるようになる。特にトリノにおける哲学教授の座を引き継いだヴァッティモは、パレイゾンのドイツ哲学に対する関心を継承し、ニーチェやハイデガーなどの読解を通じて解釈学をラディカルなポストモダンの思想へと展開し、それをさらに宗教思想や政治哲学などの文脈へと広げていった[7]。ヴァッティモに学んだ第三世代においては、トリノ学派の中身も多様化してくる。マウリツィオ・フェッラーリス Maurizio Ferraris (1956-)は当初ヴァッティモ

から受け継いだ解釈学において自らの思想を模索していたが、やがてその立場から決別し、〈解釈〉に対して〈事実〉を重んずる〈新実在論〉をドイツのマルクス・ガブリエルとともに打ち立てるようになる。実際、日本においてフェッラーリスの名前は解釈学よりも新実在論とともによく知られているといってよいだろう。これに対して、さらに一回り若いガエタノ・キウラッツィ Gaetano Chiurazzi (1964-)はヴァッティモの思想を受け継ぎつつ、現代フランス思想やギリシャ哲学にかんする独自の読解を通じて、自らの思想を展開している[8]。このように、解釈学のトリノ学派は現在進行形で豊かな思索を生み出しているということができるだろう。

本稿は、この解釈学のトリノ学派における学頭としてのパレイゾンを取り上げ、その解釈学の一端を明らかにすることによって、日本におけるトリノ学派の紹介に先鞭をつけることを目的とする。パレイゾンの思想については、日本においても美学やドイツ古典哲学の側から断片的に関心が寄せられていたが[9]、イタリア語という言語の障壁やその思想の重厚さからあまり紹介がなされることがなかった。そのような意味で、パレイゾンの中心的思想である解釈学のイントロダクションを描くことは、さまざまな分野においてパレイゾンの思想へとアクセスする入り口を提供することになるだろう。またさらに、近年パレイゾンの思想については国際的な評価も高まっている。パレイゾンの解釈学に関する主著『真理と解釈 *Verità e interpretazione*』(1971)は英語に続いてドイツ語に翻訳されており[10]、さまざまな言語でパレイゾンを読む環境が整いつつある。このような動向のなかで、本稿ではパレイゾンの思想へ日本語から入る可能性を提供しようと試みる。

2. パレイゾン——生涯と思想

『真理と解釈』の内容の検討に先だって、ここでパレイゾンの生涯と思想を概観しよう[11]。パレイゾンは 1918 年、トリノのある北イタリア・ピエモンテ州、クーネオ県のピアスコという小さな自治体で生を受けた。1935 年にはトリノ大学に入学し、本人がしばしば師として回想するアウグスト・グッツォ Augusto Guzzo に哲学を学ぶ。1936 年にはドイツ・ハイデルベルクに滞在し、ヤスパースと交流する。ここからもわかるように、若きパレイゾンの関心はドイツの実存思想へと向いていた。1938 年にはジョヴァンニ・ジェンティーレが編集を務める『イタリア哲学批評誌 *Giornale critico della filosofia italiana*』

に最初の論文「実存哲学についての覚書 Note sulla filosofia dell'esistenza」を発表し、高い評価を受けた[12]。1939 年にはトリノ大学を卒業し、卒業論文である『カール・ヤスパースと実存哲学』が書籍として出版される。その後、トリノ大学の理論哲学講座助手や郷里クーネオでの高校教師を務めるなかでイタリアは戦争へと突入するが、パレイゾンはピエモンテ州のレジスタンス運動に参加し、理論においても実践においてもイタリア・ファシズムとの闘争にかかわることになる。そして戦後はトリノ大学の教授となり、哲学のさまざまな分野において旺盛に論文・著書を発表してゆく。この間のパレイゾンの働きは典型的な大学知識人のものであり、以下の思想の概略において詳述する。1991 年にはミラノで死去、73 歳の生涯の幕を閉じたのであった。

思想の概略としては、パレイゾン自身が自らの思想遍歴を振り返って三つの時期に分類しているので、それを参照しながら主要著作を紹介してゆこう[13]。三つの時期とは、(1)人格的実存主義 Esistenzialismo personalistico、(2)〈無尽蔵性〉の存在論 Ontologia dell'inesauribile、(3)自由の存在論 Ontologia della libertà である。

(1)人格的実存主義：この時期は、若きパレイゾンがキャリアの出発点として選んだ実存主義研究を中心として、そこに〈人格 persona〉というキリスト教的カテゴリーを独自の要素として付け加えることになった思想圏域を指している。ここに含まれるのは上述のとおり最初の論文である「実存哲学についての覚書」(1938)や、これが収録されている著作『実存主義の研究 *Studi sull'esistenzialismo*』(1943)、卒業論文として出版された『カール・ヤスパースと実存哲学』(1939)であり、これらの研究が結果的に『実存と人格 *Esistenza e persona*』(1950)として結集することになる。

(2)〈無尽蔵性〉の存在論：この時期にはパレイゾンが戦後トリノ大学教授として主な研究テーマとした解釈学と美学が当てはまる。テクストであれ美術作品であれ、解釈の対象となるものは一度の解釈でその意味が尽くされることはなく、無尽蔵の解釈可能性を有しているという性質がここでは存在論として理論化されることになる。この時期に当てはまるのはパレイゾンの美学全般にかかわるものであるが、そのなかでも特に『美学――形成性の理論 *Estetica. Teoria della formatività*』(1954)が主要な著作として挙げられるだろう。また、本論後半で中心的な分析対象となる、パレイゾンの解釈学における主著『真理と解釈 *Verità e interpretazione*』(1971)もこの時期における主要業績の一つとして数え入れる必要があるだろう。

(3)自由の存在論：この時期にはパレイゾンが晩年に集中して取り組んだ、自由、悪、無などといった宗教哲学の諸テーマが当てはまる。この時期の著作はパレイゾンの死後になって出版されているものが多い。キャリアの後半に興味を見出した特徴的なドストエフスキー論『ドストエフスキー――哲学・小説・宗教経験 *Dostoevskij. Filosofia, romanzo ed esperienza religiosa*』(1993)などを始め、亡くなる直前に発表した数本の論文や、1988 年にナポリの哲学研究所 Istituto Italiano per gli Studi Filosofici di Napoli において「自由の哲学」と題して行われたいわゆる「ナポリ講義」などが、『自由の存在論――悪と苦 *Ontologia della libertà. Il male e la sofferenza*』(1995)として結晶している。この著作にはパレイゾン独自の思想の展開であるだけでなく、ヤスパース、ハイデガー、シェリングといった自身の哲学史的関心も流入してきており、その意味でもパレイゾンという思想家の集大成ということができるであろう。

このようなパレイゾンの広範な思想のなかから、本論では第二の時期に属する解釈学の主著『真理と解釈』を取り上げ、そのなかでも重要な部分を占める第一部「真理と歴史」の内容を検討することによって、パレイゾンの解釈学の一端を明らかにする。

3. パレイゾンの解釈学

3.1. 序論――〈表現的思考〉と〈啓示的思考〉

パレイゾンの解釈学の出発点として『真理と解釈』の序論に登場するのは、〈歴史主義 storicismo〉という問題関心である(15)[14]。この概念は使用する思想家によって意味が異なる場合が多いが、パレイゾンはこれをさしあたり、〈ある考えを取り扱うさいに、それがもつ思想としての固有の価値を論ずるのではなく、時代の表現として、つまりそれが生み出された時代との関連において理解するという考え方〉として把握している。例えば、福音書に記されたイエスの言葉はこのような形で歴史的に、時代の表現として理解することが可能である。歴史的現象はすべて因果関係によって相互連関しているのであり、後の時代のものは前の時代のものの影響を受けて成立している。それゆえ、イエスが語った言葉も彼の背景から生じたものであって、そこからの影響関係と結び付けて理解することが不可欠となる。例えばイエスの用いる語彙や思想などは大部分同時代のユダヤ教の影響を受けているものであり、また当時の地中海世界に共有されている背景など抜きには語るこ

とができない。このような意味で、イエスの言葉は彼の生きた〈時代の表現〉であるということができる。これは学問的に聖書を研究する歴史的・批判的聖書学にとっては当然重要なものであり、パレイゾンもその必要性そのものについて反対をするわけではない。しかしながら、パレイゾンの関心は、単に〈時代の表現〉という背景には回収されることのない哲学的価値(あるいは彼の言葉を用いるなら、「思弁的」価値)のある思想があるのではないか、ということである。このようにパレイゾンの考えは、歴史主義とは別の位相に解釈学の在処を見つけるという問題意識を出発点として有している[15]。

この問題を考えるため、パレイゾンは二つの思考形式を区別して定式化する。それは〈表現的 espressive〉思考と〈啓示的 rivelative〉思考である(16)。一方で、前者の〈表現的思考〉は、それが生み出された時代を〈表現〉するだけのものとして、読む側が歴史的・批判的方法をもって取り組まなければならない思考を指す。この場合、その思想はそれ自体ではほとんど思想的・哲学的な固有の価値を見出すことができないものとして扱われる。この思考の例はおよそどんなものでも当てはまりうるが、例えばカナの婚礼において宴会の世話役が花婿に語った以下の言葉に目を向けてみよう。「誰でも初めに良いぶどう酒を出し、酔いが回った頃に劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取っておかれました」(ヨハネ 2:10)。ここでは、はじめに良いぶどう酒を出して、皆が酔って味が分からなくなったあとに劣ったものを出すという通常の考え方に対して、あとまで良いぶどう酒を取っておいたことが良いことだという世話役の価値観がうかがえる。この世話役の考えは、それ自体で何か思想的・哲学的な価値があるというものではなく、単に当時の人間が通念として持っていた考えを反映するものに過ぎない。そのような意味で、この世話役の言葉に現れている思想は単に当時の時代を表現する〈表現的思考〉ということができる。

これに対して後者の〈啓示的思考〉は、単なる時代の表現にとどまらないような、思想として固有の価値を有する考えをもつものということができる。同じくヨハネの福音書から例を取るのであれば、洗礼者ヨハネがイエスを見て言った「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ」(ヨハネ 1:29)という言葉は、パレイゾンの区分のなかではまさに啓示的思考ということができるであろう。この言葉は、洗礼者ヨハネという歴史的現象が置かれていた時代を表現するだけのものではなく、時代を越えて現代の読者を思考へと誘うような思想の質を有している。このような考えをもって、パレイゾンは〈表現的思考〉と〈啓示的思

考〉という区分を、哲学だけではなく「人間があらゆる状況において直面するジレンマ」を構成するものとして提出するのである(16)。

重要な注意点として挙げられるのは、この二つの思考は〈あれかこれか〉という二者択一の関係にあるわけではないということである。一方ですでに見たように、単なる〈表現的思考〉であって〈啓示的思考〉ではないものは存在する。それはカナの婚礼の世話役の言葉のように、単なる時代の表現にとどまって、思想として固有の価値を有さない考えである。しかし他方で、単なる〈啓示的思考〉というものは存在しない。〈啓示的思考〉はつねに〈表現的思考〉でもある。というのも、思想として固有の価値を有する思考は、つねに特定の時代状況から生まれるものでもあり、一面においてその時代を表現するものでもあるからである。この点についてパレイゾンは以下のように述べる。

> 「啓示的思考はいつも同時に表現的である。というのも、真理はそれぞれの個別の視点においてでなければ自らを開示することはないからである。真理に到達することができるのは、代替不可能な個人的関係を介してのみであり、真理を表すことができるのは、そこにたどり着く個人的な道を通じてのみなのである」(17)[16]。

真理は、いつもかならず特定の時代状況において、そして個人の人間がもつ特定の視点において姿を現す。これは上に引いた洗礼者ヨハネの言葉にも当てはまることだといえるだろう。というのも、彼の「世の罪を取り除く神の小羊」という言葉が真理を含む〈啓示的思考〉であるとして、その思想は同時に罪、贖い、小羊といったユダヤ教的背景に還元可能な〈表現的思考〉でもあるからである。この意味において、〈啓示的思考〉はいつもかならず〈表現的思考〉である。真理は、個別的な表現、個人の視点・観点において自らを表すのである。しかしこれを逆に積極的に言い表すのであれば、個別的・個人的表現を通してでなければ、真理というものの一端には触れることができないのである。この点についてパレイゾンは、時代的状況は真理にとっての〈障害 ostacolo〉ではなく、〈乗り物 veicolo〉であると述べる。真理に到達するためには〈障害〉である時代的状況を排さなければならないのではなく、むしろ〈乗り物〉としての時代的状況がアクセスを提供してくれるものなのである。

3.2. 〈真理〉と〈解釈〉

パレイゾンは『真理と解釈』の序論において上のような〈啓示的思考〉—〈表現的思考〉という概念的枠組みを作り上げたが、この枠組みは同書第一部「真理と歴史」へと入ってゆく中で、しだいに〈真理〉—〈解釈〉という形でも表現されるようになる。この二つの枠組みが厳密な意味でどのような関係にあるかはパレイゾン解釈学の一つの研究テーマにもなりうるかもしれないが、ここではさしあたり両者は多くの部分において重なる概念として理解する。〈啓示的思考〉と〈表現的思考〉の関係を探求するのと同様に、あるいはそれと並ぶ形で、今や〈真理〉と〈解釈〉の関係が問われなければならない。この二つの概念は同書のタイトルにもなっている以上、それらがパレイゾンの解釈学にとって重要な枠組みであることは論を俟たないであろう。

パレイゾン自身の説明に入る前に、ここではまず準備段階としてプラトンのイデア論における〈一と多〉の存在論的構造を導入する。というのも、このプラトン的な思想はパレイゾンの解釈学における根本的モチーフ・構造を表しているといえるからである。プラトンのイデア論においては、一方で〈イデア〉(例えば美のイデア)と、他方で〈個別の存在者・現象〉(例えば、美しいものとしての美術品)という対が存在する。この二者はそれぞれオリジナルとコピーの関係にあり、〈イデア〉が唯一無二である一方で、その性質を受け継ぐ〈個別の存在者〉は多数存在する。美そのものとしてのイデアがただ一つしか存在しない一方で、個別の美しいものとしての美術品は数多く存在するのである。また一方で〈イデア〉は〈個別の存在者〉において自らを現し、他方で〈個別の存在者〉は〈イデア〉を分有するといわれる。美そのものであるイデア自体は人間にとって知覚不可能であるが、個別の存在者である美術品においてその片鱗が現れていることで、人間はイデアを想起することができる。そして、個別の存在者である美術品がそもそも美しいといわれるのは、それが美のイデアを分有していることによるのである。このように、プラトンのイデア論には〈一〉つのイデアに対して〈多〉くの個別的存在者があるという〈一と多〉の存在論的構造が確認できる。

パレイゾンの解釈学における〈真理〉と〈解釈〉も、これと似たような〈一と多〉の存在論的構造を持っているということができる。パレイゾンの〈真理〉概念は、そのユニークさゆえに概念史における位置づけが多少困難なところもあるが[17]、〈解釈〉とのかかわりで言えば、上述のプラトン的な〈一と多〉の存在論的構造が明らかに確認できるように

なっている。すなわち、〈真理〉はただ〈一〉つしか存在しないのに対して、その〈解釈〉は〈多〉様なのである。「真理はただ一つである。しかし、その表現 formulazione はつねに多様である」(61)。「解釈は一つではないし、一つではあり得ないし、一つであってはならない。定義からして、それは多様なのである」(61)。この〈真理〉の唯一性とその〈解釈〉ないしは〈表現〉の多様性は、パレイゾンの解釈学の全体を貫く根本原理であるといっていい。このような〈真理〉と〈解釈〉のもつ〈一と多〉の構造は、聖書解釈にも当てはめることができるだろう。聖書に真理を見出す者は、何とかしてそれを自らの仕方で表現しようとする。しかし、その〈表現〉ないしは〈解釈〉は、真理そのものではない。他の人も同じように聖書を読み、解釈を生み出す以上、自分の解釈は多くあるなかの一つでしかないのである。同じことは、聖書の内部における興味深い問題の一つである〈共観福音書〉にもいえるかもしれない。ナザレのイエスという人格に出会った人々は、そのなかに何らかの〈真理〉を感じ取った。そこから生まれたさまざまな語録や伝承をもとにして、それぞれの福音書記者は一部共通の史料を用いつつも異なる福音書を編み上げることになる。ここにも、〈真理〉が一つであるのに対して、それに対する〈解釈〉が多数存在するというパレイゾンの構図が見て取れるといえる。

プラトンのイデア論とパレイゾンの真理論には〈一と多〉以外にも並行する構造が見出せる。第一に、直接的な認識対象にできるかどうかという点において同じ構造が認められるだろう。私たちはイデアである美そのものを知覚することはできないが、その具体的な現れを美しいものとしての芸術作品にみることができる。同じように、真理そのものは直接対象化することはできないし、完全に解き明かされてしまうこともない(これについては後述)。しかし他方で、人は解釈という形において真理の片鱗を具体的な現れとして表現することができる。第二に、永遠性と時間性という対においても〈イデア―個別存在者〉と〈真理―解釈〉のあいだで似た構造を見ることができる。イデア論においては、美のイデアは永遠の存在である一方で、個別の美しいものは時間のなかにおけるその具体的な存在を表現する。パレイゾンの解釈学においても同様に、真理は永遠のものである一方で、解釈はその歴史的表現として必然的に現われる。ここでとくに強調されるのは、真理にとって解釈は歴史的・個人的な表現形式であるという点である(54)。一方で、解釈は歴史的である。というのも、真理が永遠のものであるのに対して、解釈は歴史のなかにおけるその具体的な表現の形式だからである。他方で、解釈は個人的でもある。というのも、

真理には唯一妥当な客観的表現というものはなく、つねに個人のパースペクティヴから眺められた解釈が存在するだけだからである。これは逆に言えば、真理へのアクセスはつねに歴史的・個人的な解釈という途を通らなければならないことを意味している。〈啓示的思考〉にとって〈表現的思考〉が障害ではなく乗り物であると特徴づけられたように、解釈も真理への直接的なアクセスを妨害するものではなく、むしろそれによってはじめて真理の一端に触れることができるような通路なのである。

3.3. 真理のもつ二つの性質――〈対象化不可能性〉と〈無尽蔵性〉

このような〈真理〉と〈解釈〉のあいだにおける〈一と多〉の存在論的構造を生み出すものとして、パレイゾンは〈真理〉の持つ二つの否定的な性質について論じている。それは〈対象化不可能性 inogettivabilità〉と〈無尽蔵性 inesauribilità〉である。まず〈対象化不可能性〉(文脈によっては「隠匿性 ulteriorità」の語が用いられることもある)であるが、これはさしあたり真理が「これ」という形で一義的に対象化して説明できるものではないと理解することができる。例えば聖書の〈真理〉について論ずるとき、それを何か一つの命題に要約することは不可能である。もちろん、ヨハネ 3:16 のように、福音の核心だと伝統的にいわれるような章句はある。しかし、それが聖書の真理を一義的に代表できると仮に言うのであれば、それは聖書の〈真理〉を過小評価していないだろうか。あるいは、もしヨハネ 3:16 に聖書の〈真理〉が一義的に表されているのであれば、ヨハネ 3:16 を読むことによって私たちはもう聖書 66 巻を読む必要がなくなるのではないだろうか。これに対してパレイゾンは否と答えるであろう。というのも、これらはすべて真理と解釈のもつ〈一と多〉の存在論的構造に反するからである。〈一〉つの真理からは〈多〉数の解釈が生じる。真理が〈一〉つであるのに対して、その解釈は〈多〉数存在しなければならない。真理を対象化するということは、この構造に反して、真理を唯一の解釈へと落とし込んでしまうことであるともいえる。この意味で、真理の対象化不可能性は還元不可能性と言い換えることも可能であろう。真理は対象化されて完全に解き明かされることはなく、唯一の解釈へと還元されてしまうこともないからこそ真理なのである。

真理の持つ第二の性質である〈無尽蔵性〉は、真理が汲みつくすことのできない解釈の可能性を有していることを表している[18]。これは第一の性質である〈対象化不可能性〉からの直接的な帰結であり、美学も含めたパレイゾンの解釈学的思考における中核的概念な

ので、特に強調に値する。真理の対象化不可能性(ないしは還元不可能性)によって、真理を一つの解釈へと落とし込むことはできないということが確認された。これは裏を返せば、真理は〈一と多〉の構造のゆえに最初から多数の解釈へと開かれているということである。ある時に聖書を読んで一つの読みかたに納得したとしても、次に違う状況で同じテクストに向う時にはまったく異なった解釈を取ることになるかもしれない。そして、もちろん異なった人々はそれぞれの解釈をするのであるから、解釈の多数性、あるいは多様性は何倍にも豊かになる。ここで、聖書の真理はいうなれば、尽きることなく次から次へと水が滾々と湧き出てくるような泉のイメージでとらえることが可能だろう。〈一〉つである真理は、ただ一つの解釈によって汲みつくされるようなことはなく、〈多〉数の解釈を無尽蔵に生み出してゆくのである。

パレイゾンは真理の第一の性質である〈対象化不可能性〉(この引用では〈隠匿性 ulteriorità〉)と第二の性質である〈無尽蔵性〉の関係を以下のように言い表している。

> 「隠匿性は、隠蔽、不在、不明瞭といったような間違った見かけで姿を現すかわりに、無尽蔵性によってその真の起原を示すことになる。それはつまり、豊かさ、満ち足りていること、余り溢れていることである。〔・・・〕それは言表不可能なものの神秘主義ではなく、無尽蔵なものの存在論 non il misticismo dell'ineffabile, ma l'ontologia dell'inesauribile なのである」(28)。

真理が〈対象化不可能性〉ないしは〈隠匿性〉という性質のみを有するのであれば、それは否定的な意味合いしか持つことができない。真理は不明瞭で隠蔽されており、存在しないかのように思われるようなものなので、私たち人間にとって真理は到達することのできない、言い表すことのできない何か神秘的なもののように思われる。実際そのような側面はたしかに存在するだろう。しかし、パレイゾンはそこに第二の性質である〈無尽蔵性〉を加えることによって、真理がまったく異なった側面を見せると主張する。真理が人間に対して完全に姿を現すことがないからこそ、人間は何度もそこに立ち返って自分なりの解釈を引き出してくる。真理が一つであるのに対して、解釈は必然的に多様である。そこでは一つの真理という源泉から、余り溢れるほどの豊かな解釈の可能性を見ることができる。このような意味で、パレイゾンの解釈学は「無尽蔵なものの存在論」であるといわれるの

である。

4. むすび

本論では聖書解釈にとって哲学的解釈学も重要な意義を持っているという確認から出発し、従来の解釈学研究がドイツ・フランスの伝統に偏っていたことを指摘したのち、近年の現代思想におけるイタリア哲学の受容動向と絡めてトリノの解釈学の学派、ならびにその創始者であるルイジ・パレイゾンの解釈学を一部検討するという問題設定を行った。パレイゾンは歴史主義という哲学的課題に取り組むために〈表現的思考〉—〈啓示的思考〉ないしは〈真理〉—〈解釈〉という概念的枠組みを構築するが、そこにはプラトン的な〈一と多〉の存在論的構造が確認できる。真理は唯一であるが、そこから引き出されてくる解釈は必然的に多様である。真理は無時間的なものであるが、それはつねに解釈という歴史的具体性を帯びた定式の形で表現される。また最後に、このような〈一と多〉の存在論的構造の根本にある真理の二つの性質、すなわち〈対象化不可能性〉と〈無尽蔵性〉についても確認した。一方で真理は「これ」という形で対象化することができない、つまりただ一つの解釈へと還元することができない。他方で、それは真理が尽きることのない泉として、これまでも、今も、そしてこれからもずっと解釈者に対して解釈を供給し続けるということを意味している。パレイゾンの解釈学における〈一と多〉の存在論的構造は、このような意味で無尽蔵性の存在論なのである。

最後に、パレイゾンによるこの哲学的解釈学が聖書解釈という文脈においてどのような意義をもちえるのかについて、若干のコメントを付すことにしたい。パレイゾンの解釈学には多くの興味深い考え方や概念(例えば〈無尽蔵性〉など)があるが、ここでは〈対象化不可能性〉を取り上げて、〈真理を一つの解釈へと還元してしまうことに対する抵抗〉として考察しよう。この考え方は聖書解釈が接するさまざまな問題に対して応用可能であるといえる。例えば一方で、パレイゾン自身が解釈学の問題として設定した〈歴史主義〉が挙げられる。たしかに歴史的・批判的方法を用いて聖書を研究することは必要であり、そのアプローチが持つ固有の原理と論理において徹底されなければならない。しかし同時に、歴史的・批判的方法を用いて浮かび上がる解釈が聖書の〈真理〉と同一視されるならば、パレイゾンはそれに対して否と答えるであろう。歴史的・批判的方法を用いて書かれた聖

書注解を読んだからといって、それ以降は聖書をもう読まなくていいということにはならない(もちろん聖書学者が実際にそのような主張をするわけではないが)。聖書は、そこから溢れるほどの解釈が湧き出してくるような、汲みつくせない泉なのである。

他方で、パレイゾンの解釈学は同時に、聖書の〈字義通り〉の意味を歴史的・科学的事実と同一視する〈聖書主義〉に対しても問題を提起するものだとはいえないだろうか。というのも、聖書の字義通りの意味が歴史的・科学的な意味での事実と同一であると主張することは、それも真理を一つの解釈へと還元してしまうことに他ならないからである。私たち人間がなしえるのはあくまで〈解釈〉でしかなく、私たち人間は決して聖書の〈真理〉を所有してなどはいない。パレイゾンが教えるのは、このような解釈学的謙虚さであるといえるだろう。〈真理〉は対象化不可能であり、ただ一つの解釈に落とし込むことは不可能なのである。しかしそれにもかかわらず、いやまさにそれだからこそ、〈真理〉は解釈者を誘って多数の〈解釈〉を生み出すという無尽蔵性を発揮する。人間が聖書の真理を所有していないという不完全性は、恐れるべきことでもなんでもなく、ただその弱さのうちに神の強さが表れるための仕掛けに過ぎないといえないだろうか。

付録：ルイジ・パレイゾン著作集　タイトル一覧

Luigi Pareyson, *Opere complete*, a cura del Centro Studi Folosofico-religiosi Luigi Pareyson, Mursia: Milano.

1. ヤスパース
2. 実存主義の研究
3. 主導権 initiativa と自由
4. 実存と人格
5. フィヒテ
6. 美学
7. ドイツ観念論の美学 I　〔カント・シラー・フィヒテ〕
8. ドイツ観念論の美学 II　〔フィヒテ・ノヴァーリス〕
9. ドイツ観念論の美学 III　〔ゲーテ・シェリング〕
10. 美学の諸問題 I
11. 美学の諸問題 II
12. 美学の諸問題 III
13. キルケゴールとパスカル
14. 解釈と歴史
15. 真理と解釈
16. 現代哲学の可能性 I
17. 現代哲学の可能性 II
18. ドストエフスキー
19. 存在・自由・曖昧さ
20. 自由の存在論

---

[1] 本原稿の一部は、2024 年 3 月 29 日に東京基督教大学の共立基督教研究所における「聖書解釈学研究プロジェクト」の研究会で発表したものに基づいている。本研究プロジェクトを主導している須藤英幸氏ならびに研究会でコメントをしてくださった参加者の方に、

ここで改めて謝意を表したい。

[2] 解釈学の一般的な思想史としては以下を参照。ジャン・グロンダン(著)、末松壽、佐藤正年(訳)『解釈学』白水社、2018 年. ただし、これは以下の拙書評と併せて読まれたい。岡田勇督「書評：ジャン・グロンダン(著)、末松壽、佐藤正年(訳)『解釈学』白水社、2018 年」『キリスト教学研究室紀要』第 7 号、2019 年、61-69 頁.

[3] 解釈学的神学はブルトマンから始まり現在にいたるまで組織神学における重要な立場の一つであり続けている。ブルトマンの解釈学については上掲のグロンダンの入門書が参照できる。また、解釈学的神学の最新の展開については以下を参照。ディルク・エーヴァース(著)、岡田勇督(訳)「ドイツ語圏のプロテスタント教義学における最新の動向」『キリスト教学研究室紀要』(12), 2024 年, 56-80 頁。

[4] 一例として、それぞれ以下のものが挙げられる。Jean Greisch, „Die hermeneutische Wende der Religionsphilosophie“, in Markus Enders/ Holger Zaborowski (Hg.) *Phänomenologie der Religion: Zugänge und Grundfragen*, Verlag Karl Alber: Freiburg/ München, 2004; Jean Grondin, *Du sens des choses: L'idee de la métaphysique*, PUF, 2013.

[5] 日本においては、例えば以下のような本が参照できる。岡田温『イタリアン・セオリー』中央公論新社、2014 年；上村忠男『現代イタリアの思想を読む：増補新版クリオの手鏡』平凡社、2009 年. ただし、現代イタリア思想が紹介されるさいには生政治の哲学や、その中心的存在であるアガンベンに焦点があてられることが多く、解釈学の存在にはあまり注目されることがなかった。その意味で解釈学のトリノ学派を扱うことは、現代イタリア思想を眺めることに対しても新たな視点を提供するものであるということができる。

[6] 「トリノ学派」という呼称は、以下の研究書にならった。Thorsten Gubatz, *Heidegger, Gadamer und die Turiner Schule: Die Verwindung der Metaphysik im Spannungsfeld zwischen Glaube und Philosophie*, Ergon Verlag, Würzburg, 2009.

[7] ヴァッティモについては、日本における翻訳として以下のものがある。ジャンニ・ヴァッティモ著、上村忠男訳『哲学者の使命と責任』法政大学出版局、2011 年。ジャンニ・ヴァッティモ、ピエル・アルド・ロヴァッティ編、上村忠男他訳『弱い思考』法政大学出版局、2012 年。ジャンニ・ヴァッティモ著、多賀健太郎訳『透明なる社会』平凡社、2012 年。また、佐藤啓介がおもに宗教思想の観点からヴァッティモについて論じている。佐藤啓介「イタリア哲学における近代/ポスト近代論の一様相――ヴァッティモのポスト形而上学的宗教論への予備的ノート」『キリスト教と近代化の諸相』2008 年、63-80 頁。佐藤啓介「ジャンニ・ヴァッティモの宗教論――神の死以降の愛論の可能性」『宗教哲学研究』(29), 2012 年、57-69 頁。

[8] Gaetano Chiurazzi, *Dynamis. Ontologia dell'incommensurabile*, Guerini Scientifica, 2017. (英語訳: Gaetano Chiurazzi, *Dynamis: Ontology of the Incommensurable*, translated by Robert T. Valgenti, Springer, 2021). また、キウラッツィのガダマー研究として以下も参照。Gaetano Chiurazzi, *L'esperienza della verità*, Mimesis Edizioni, 2011(英語訳: Gaetano Chiurazzi, *The Experience of Truth*, translated by Robert T. Valgenti, SUNY Press, 2017).

[9] 例えば、美学では以下が挙げられる。山田忠明編『エステティカ――イタリアの美学クローチェ&パレイゾン』ナカニシヤ出版、2005 年。ここではパレイゾンの側からは

「クローチェ美学における解釈の概念」のほかに「人格の哲学」がパレイゾンの美学・解釈学の「簡便な要約」として訳出されている(同書 210 頁)。

[10] Luigi Pareyson, *Truth and Interpretation*, translated and with an introduction by Robert T. Valgenti, revised and edited by Silvia Benso, foreword by Gianni Vattimo, SUNY Press, 2015; Luigi Pareyson, *Wahrheit und Interpretation*, übersetzt von Gianluca de Candia, Felix Meiner: Hamburg, 2023.

[11] パレイゾンの伝記的事実については、以下を参照。Francesco Tomatis, *Pareyson: Vita, filosofia, bibliografia*, Editrice Morcelliana: Brescia, 2003, p.9-35.

[12] Luigi Pareyson, "Note sulla filosofia dell'esistenza," *Giornale critico della filosofia italiana*, diretto da Giovanni Gentile, Anno XIX, Seconda serie, volume VI (Gennaio-Febbraio 1938-VXI), 1938, p.407-438.

[13] これについても以下を参照。Tomatis, *Pareyson: Vita, filosofia, bibliografia*, p.37-67.トマーティスによれば、パレイゾン自身はこの説明を『実存と人格』の第四版序論で行っているとのことであるが、本稿筆者はこの版を確認できなかった。

[14] 以下、パレイゾンの『真理と解釈』からの引用は次の版から行い、括弧で頁数を示す。Luigi Pareyson, *Verità e interpretazione*, Quarta edizione, Mursia: Milano, 1971. なお、理解や翻訳の補助として上述の英語版とドイツ語版を用いた。

[15] 〈歴史主義〉は解釈学という立場にとっての重要な関心事であり続けてきた。例えば、ガダマーも主著の『真理と方法』や多くの論文において歴史主義の問題に言及している(例として、Gadamer, "Hermeneutik und Historismus" in *Gesammelte Werke Band 2.*, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck): Tübingen, S.387-424. ないしは Gadamer, "Historismus" in Religion in Geschichte und Gegenwart, Band 3., 3.Auflage, 1959, S.369-371.などを参照)。ただし、歴史主義という言葉の多義性を念頭に置いたうえで、ガダマーとパレイゾンの歴史主義が果たしてどれくらい重なっているのかは一つの問いである。

[16] ここに訳出した「個人的」という言葉の原語は personale となっている。パレイゾンにおいては、persona という言葉は文脈によって〈人格的〉と〈個人的〉という意味での訳し分けが必要となるだろう。

[17] パレイゾンの〈真理〉は一般的な真理論において念頭に置かれる〈対応説〉や〈整合説〉などとはすこしずれるところがある。それはどちらかというとハイデガーの論ずるアレーテイアとしての真理に近いところがあるだろう。それは例えば芸術作品のような存在者が覆いを取られたように現前し迫ってくるという現象学的な真理概念である。現象学と解釈学の連続性から、パレイゾンの真理概念もある程度ここに連なるものとして説明することは可能だが、パレイゾンの場合は存在者が現象として主体である芸術の鑑賞者に現前するという動的な出来事の性格よりも、本論において詳述する〈一と多〉の構造が前面に出ている。

[18] 解釈における同様の〈無尽蔵性〉の構造は、例えばガダマーなどにおいても見られる。ガダマーの場合、この構造は解釈者である人間の〈有限性〉という性質と深くかかわっている。これについては以下の拙稿を参照。岡田勇督「H.G. ガダマーの解釈学における〈有限性〉の概念」『キリスト教学研究室紀要』第 5 号、2017 年、77-90 頁.

（おかだ・ゆうすけ　イタリア・トリノ大学客員研究員）